

クラウド移行の取り組みを自己評価し、 投資の価値を最大限に高める

他社のクラウドに対する認識、およびクラウド移行に関する的確なアドバイス

詳細はこちら >





目次

3 エグゼクティブサマリー [»](#)

4 主な調査結果の概要 [»](#)

5 調査方法 [»](#)

6 「万が一」が引き起こすジレンマ [»](#)

10 データ移動のコスト [»](#)

12 重要なワークロードに最適な環境 [»](#)

17 現在もこれからも、変わり続ける市場環境 [»](#)

20 まとめ [»](#)

エグゼクティブサマリー

クラウドコンピューティングは2000年代初頭から利用されていますが、インターネット上のアプリケーションとして始まったクラウドの定義も、この20年間で、エンターテインメント、金融、行政、医療分野の本格的なユースケースにまで広がっています。クラウドが意味するものは人によって異なるため、クラウドテクノロジーの正しい実装方法については誤解されている場合がありますが、実際には、正しい方法も間違った方法も存在しません。組織が別のモデルではなく単一のクラウドモデルを選択したからといって、組織がその結論に満足しているとも、またそれがビジネスにとって最適な選択であるとも限りません。

この状況は多くの組織にとって、現在の認識から一歩離れて次のように自問する絶好の機会となります。「これまでに何を学んだか。業界内でどのような変化が生じているか。自分はどの領域を改善できるか」。多くの人は、自身の行動を振り返って評価するというプロセスをないがしろにしていますが、こうした自己評価を行うことで、クラウドコンピューティングへの投資の価値の最大限に高めるような機会がどこにあるのかを特定することができます。

このホワイトペーパーは、2020年11月にHPEの委託によって実施されたクラウドに対する認識調査¹の結果に基づくものであり、調査の対象者は、自己評価の結果とクラウドに対する認識を回答しています。この極めて有益な情報により、冗長性、データ移動、ワークロード、クラウド移行に関連する機会がどこにあるのかが明らかになりました。

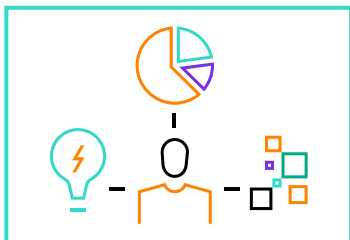
このホワイトペーパーで、世界の企業に比べ、自社のITクラウド戦略がどの程度進んでいるのかをご確認ください。



¹ 『HPE GreenLakeチャレンジャー調査レポート (HPEの委託によるレポート)』、Emerald Research Group、2020年11月

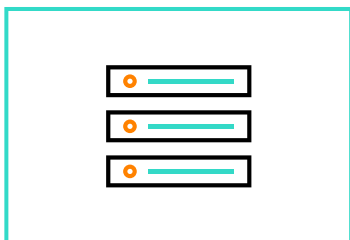


主な調査結果の概要



リスク軽減の観点から、3分の2の企業ではインフラストラクチャの60%未満しか使用していないことが、回避可能なITコストの増大を招いている

パブリッククラウドかプライベートクラウドかを問わず、多くの組織が、常にインフラストラクチャの大部分を使用していないことが、予想を上回るコストが生じる要因となっています。こうした回避可能なコストは、収益に直結する革新的な機会に再投資することができます。



データイグレス（データをクラウドから移動するコスト）の問題があるため、70%の組織は、データをオンプレミス、コロケーション施設、またはプライベートクラウドで保持している

今回の調査では、76%の回答者が、データイグレスを最大の懸念事項の1つと捉えていることが明らかになりました。悪意のある行為のデータ通信量や機密性のリスクを監視したいと考える組織は、今もオンプレミスソリューションを利用しています。



およそ40%の意思決定者は、自社が重要なワークロードを不適切な場所で実行していると考えている

4分の3の企業は、ワークロードで何らかのハイブリッドクラウドを利用しているものの、ワークロードが実際に配置されている場所とワークロードを効率よく実行できる場所には大きなずれがあると述べています。



イノベーションが最優先事項であるにもかかわらず、回答者の過半数は、今もIT予算の60%以上をメンテナンスに費やしている

今回の調査では、新型コロナウイルス感染症の影響により、リモートワークに迅速に移行して新たなクラウド戦略を導入するために、クラウドへの移行が平均62%増加していることがわかりました。その一方で、ほとんどの回答者はメンテナンスに多くの予算を費やしていますが、市場の混乱と変革の間でバランスを保っているこの時期にさらなるイノベーションを実現するには、こうした傾向を変えていく必要があります。





調査方法

今回の調査は、米国では500人以上、その他の国では100人以上の従業員を抱える組織にフルタイムで勤務する、25歳以上の従業員を対象に実施されました。これらの企業はいずれも、米国では1億ドル以上、その他の国では5000万ドル相当の収益をあげています。また、米国、カナダ、英国、フランス、ドイツ、オーストラリア、シンガポール、韓国、インド、および日本における、およそ5,000人のIT部門の意思決定者、ビジネス部門の意思決定者、データサイエンティスト、および開発者が対象となっています。



組織の1/3のみが

60%

の容量を活用

およそ33%のパブリッククラウド容量、
33%のオンプレミス容量が未使用になっている

「万が一」が引き起こすジレンマ

オーバープロビジョニングを選ぶか選ばないか、それが問題だ

変動する需要への対応とコスト管理とのバランスをどのように取るかという問題は、長年、多くの企業を悩ませてきました。そしてこれまでは、容量をオーバープロビジョニングするか一部を温存することで予想される需要の変動に対応することが、その解決策とされていました。

今回の調査では、組織のパブリッククラウドとオンプレミス両方の資産において、驚くほど多くのIT容量が有効に利用されていないことが明らかになりました。コンピュートとストレージの機能、および1日あたりの平均使用量について質問したところ、容量の60%以上を利用している組織は3分の1にとどまることがわかりました。

また、プロビジョニング済みの広範なインフラストラクチャも反映してもらうと、1日あたりおよそ33%のパブリッククラウド容量、および33%のオンプレミス容量が未使用になっているとの報告がありました。このパターンは、調査対象のすべての地域で表れています。



それぞれの環境で、1日にどのくらいの
コンピュート容量が使用されていますか



それぞれの環境で、1日にどのくらいの
ストレージ容量が使用されていますか

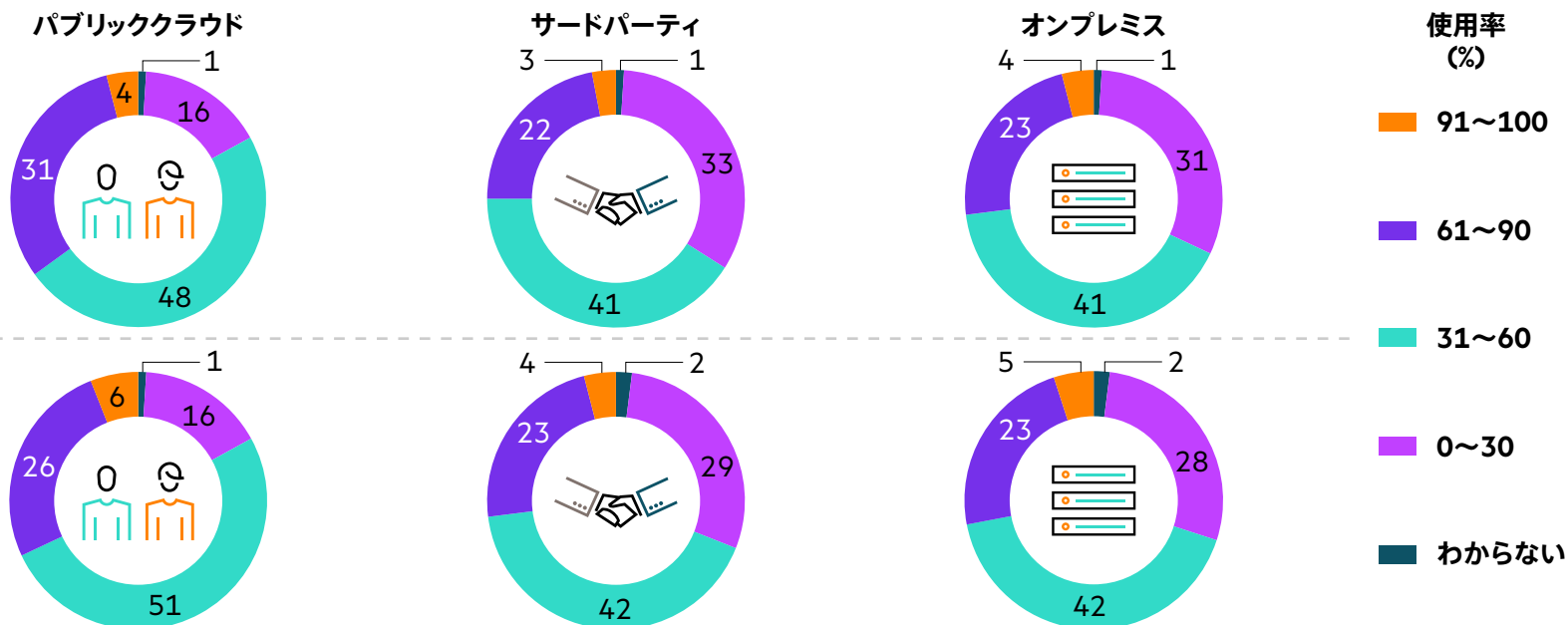


図1. コンピュートとストレージの使用率



770万ドル

(オーバープロビジョニングされたパブリッククラウドの年間コスト)

+

750万ドル

(使用されていないオンプレミスインフラストラクチャの年間コスト)

=

1500万ドル以上

(不適切に配置されたリソースのコスト)

冗長化のコストに関する衝撃的な事実

オーバープロビジョニングを選んだ企業は、お客様だけではありません。今回の調査で明らかになったように、どちらのクラウドモデルでも、クラウドの実装に伴うITリソースのオーバープロビジョニングと低使用率が報告されています。日常業務への影響こそ少ないものの、こうした冗長化のアプローチをとることは、その組織がコスト面の影響を理解していないことの証明となるかもしれません。冗長化には多額の予算が使われますが、その分を他部門に回す方が利益になる可能性があるためです。環境全体を完全に把握できていれば、アーキテクチャーの無秩序な拡張や断片化によってリソースが過剰に供給されているような問題のある領域を減らすことができます。こうしたインテリジェンスを利用することで、十分な情報に基づいた、データ主導の賢明な意思決定を下すことが可能になります。それによってただちに収益を改善するとともに、回収された資金を、収益に直結する他のプロジェクトに投入することができます。

実際の効果を見極めるため、回答者には、パブリッククラウドとオンプレミスでの実際の支出額と、ITの年間総予算を尋ねました。

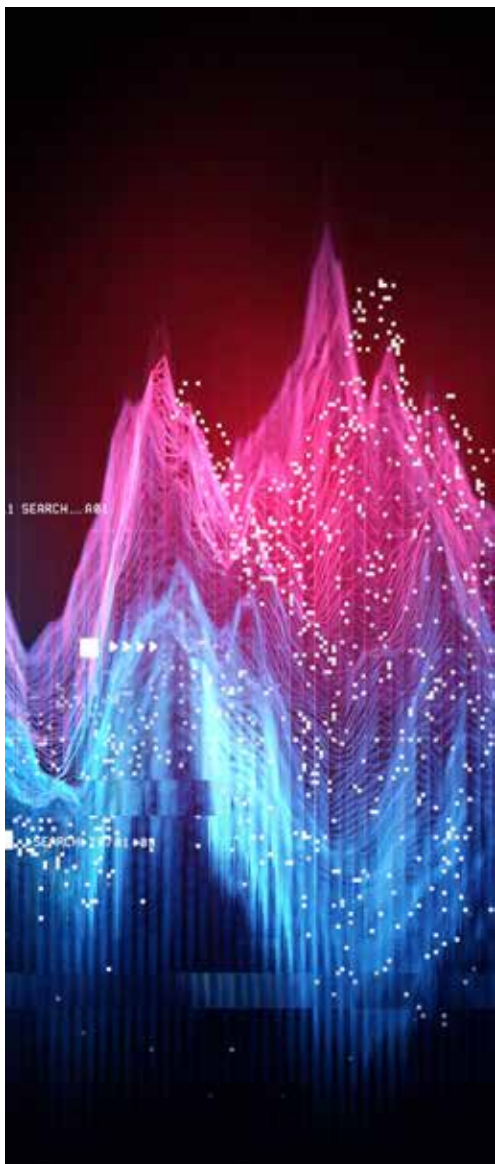
パブリッククラウドとオンプレミスの両方の資産で、プロビジョニングされているインフラストラクチャ容量の3分の1強が常に未使用となっているとの調査結果に基づいて計算したところ、こうした企業では、1年間におよそ770万ドル（平均）をオーバープロビジョニングされたパブリッククラウドに、また1年間におよそ750万ドルを使用されていないオンプレミスインフラストラクチャに割り当てていることが明らかになりました。年間で合計1500万ドル以上（平均）が、不適切に配置されたリソースに費やされていることとなります。

リスクの軽減が過剰リソースの要因となっている

組織が必要以上の容量を確保している主な理由を3つ選択してもらうと、パブリッククラウドとプライベートクラウドの利用者ではわずかな違いしかありませんでした。どちらのモデルでも、主な理由として挙げられたのは、バックアップ、ディザスタリカバリ、そして非常時への備えでした。ほとんどの企業は、何らかの理由でアクセスが切断されるとビジネスが中断されてしまうため、このように考えるのは当然です。パブリック、プライベート、ハイブリッドを問わず、すべてのクラウド実装において、リスクの軽減は最優先事項となるはずですが。

それでは何が意外かという点、60%弱の回答者が、常に必要以上の容量を確保している主な3つの理由に、リスクの軽減を含めなかったことです。このことから、過半数のケースで、冗長容量が過剰に確保されている理由は、複雑なハイブリッドクラウド資産の管理が難しいことにあり、さらに、管理機能がサイロ化されている、エンドツーエンドの可視化を実現できていない、価格体系がわかりにくいなどの要因により、問題が深刻化していることが推測されます。


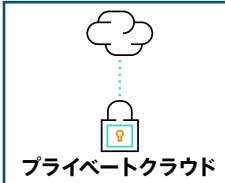




また、パブリッククラウドとプライベートクラウドの利用者の違いも明らかになっています。

- 不確実な需要:** インフラストラクチャの使用率が低い理由として、プライベートクラウドの利用者が2番目に多く挙げたのは(43%)、各ワークロードの需要予測が困難なことでした。(パブリッククラウドの利用者は、この理由を3番目に挙げています)。
- 変動するパブリッククラウドのコスト:** パブリッククラウドの利用者のおよそ3分の1(35%)が、将来のリソース需要を予測することは困難だと回答しており、また(同じ割合の回答者が)価格やサービスを頻繁に変更するパブリッククラウドプロバイダーに問題があるためにクラウドのコストを最適化しにくいと考えていました。
- 人的要因:** 人が関与しなければならないプロセスがあることは、割り当てのジレンマが発生する主な要因となっています。およそ36%の回答者は、不要になってからも、プライベートクラウドのプロビジョニングを終了することを失念していたと述べています。これに対してパブリッククラウドでは、26%が完了後もプロビジョニングを終了せずに放置していました。どちらのモデルでも、自動化プロセスが導入されていれば、コストを回収することが可能です。

表1. 冗長容量を過剰に確保している主な理由

	 パブリッククラウド	 プライベートクラウド
パブリック/プライベートクラウドのリソースをバックアップまたはディザスタリカバリ目的で使用しており、この容量を非常用に確保している。	43%	47%
ピーク時の容量ニーズに合わせて、パブリック/プライベートクラウドのリソースをプロビジョニングしている。	38%	42%
需要を予測することが困難である。	35%	43%

重要なポイント - 3分の2の企業では、コンピュートとストレージのリソース使用率が常に60%未満であり、どちらのクラウドモデルでも、多くの組織はコストが意思決定に与える影響を十分に把握しないまま、リスク軽減のための安全策を求めていると結論できる。



自己評価の チェックポイント



クラウドのすべてのコストを可視化



ピーク時の容量ニーズに合わせてプロビジョニングしたり、需要予測が難しかったり、不要になったインスタンスの終了を失念したりすることは、インフラストラクチャの状況が可視化されていないことが直接の原因である可能性があります。実際に、パブリッククラウドの利用者の5分の1、プライベートクラウドの利用者の3分の1が、過剰に冗長化されている領域の見極めが不十分であることを認めています。

見えないものを管理することはできません。修正が必要な領域を見極めなければならない企業にとって、こうした余剰容量がどこにあるのかを可視化することは、最優先事項となるはずですが、問題が見えるようになれば、それを解決することができます。従量制のIT環境や従量制課金モデルの人気が高まる中、HPEでは、あらゆる場所で、アプリケーションとデータにクラウドのエクスペリエンスを提供するソリューションの導入をお勧めしています。ソフトウェアプラットフォームにより、クラウドサービスの運用と有益な情報の取得を一元化できるようになり、お客様はコストとコンプライアンスに関する有益な情報を取得するとともに、クラウドサービスを迅速に展開して、ハイブリッド資産全体の管理を簡素化することができます。また、使用量の測定とアクティブなキャパシティ管理を通じて、常に需要に先立って必要な容量を確保できます。「万が一」の場合に備えて容量をオーバプロビジョニングしたり温存したりする必要がなくなり、必要な容量を必要なときに使用して、使用した分の料金のみを支払えるようになります。



76%

の回答者が、データイグレスを最大の課題の1つと捉えている



データ移動のコスト

データの有効活用を実現

移動中のデータの優先順位は、IT部門が留意しなければならない重要事項の1つです。データを目的地に移動する際に、そのデータをどのように保存、保護、管理するかは、どちらのクラウドモデルがエクスペリエンスと成果を最適化できるか判断する際の重要な要素となります。データの転送について見てみると、ビジネスに適したクラウドモデルを検討する際に、データの入り方（イグレスコストは一切発生しない）とデータの出方（データイグレスコスト）への対応を評価する必要があります。

今回の調査では、組織にとってデータの移動がどの程度の課題となっているかを尋ねたところ、76%が（2つの）最大の課題の1つと捉えていました。人工知能（AI）や顧客関係管理（CRM）などのデータ量の多いワークロードでは、膨大なデータの保管だけでなく、リアルタイムにデータを利用して分析や迅速な意思決定を行うためのデータ移動も必要となります。

考慮しなければならない重要な要素の1つにパブリッククラウドプロバイダーのコストがあり、これは、保管するデータの量、必要なアクセス頻度とアクセス速度によって大きく変動します。多くのクラウド利用者が、こうした予期しない料金の変動に困惑していることから、コストは、クラウドへのデータ配置を検討する際の最優先事項となっています。

セキュリティ対策の強化は必須

デジタルトランスフォーメーションの実装において、セキュリティという用語が日常的に使われるようになったのには理由があります。セキュリティ侵害が発生した場合に生じる悪影響を考えると、事業継続性、コンプライアンス、データの機密性に関するリスクは極めて重大なものであり、無視することなどできません。データやワークロードが移動すれば、データ保護のニーズも増大します。データイグレスのトラフィックは、悪意のある行為の影響を受けやすく、コスト面で重大な影響を受ける可能性があります。今回の調査では、45%の回答者が、今後2年以内にワークロードをオンプレミスに戻す主な理由として、セキュリティの強化を挙げています。

重要なポイント - セキュリティリスクと変動しやすいデータイグレスコストは、多くのクラウド利用者が今後もハイブリッドクラウドモデルを利用し続けたいと考える要因になる。

自己評価の チェックポイント



0と1だけではない、 データの留意事項とは

データ移動のコスト

最終的には各企業が、データの機密性、ボリューム、速度といった優先事項に基づいて最適な環境を評価する必要がありますが、その際は、すべてのワークロードとデータが同じような性質を備えているわけではないことに留意する必要があります。クラウド環境を評価する際は、組織がこの不透明なデータイグレスコストをこれまでいくら支払ってきたかを、時間をかけて調査することをお勧めします。多くの企業が、コスト面の影響や継続的な負担に驚いていますが、こうした問題は回避することができます。

最適なクラウド環境がどのようなものかについては、答えは1つではありません。だからこそ、多くの組織がハイブリッドクラウドアプローチを採用しています。最近では、ハイブリッド機能やマルチクラウド機能が含まれるソリューションに注目するIT意思決定者が増えています。これは、オンプレミスインフラストラクチャを最大限に活用しながらも、導入したその日からクラウドのメリットを得られるためです。このアプローチでは、主要なビジネスワークロードの大部分をオンプレミスで実行しつつ、特定のアプリケーションをパブリッククラウドに柔軟に展開できます。また、DevOpsのアプローチを取り入れてクラウドネイティブアプリケーションの開発に着手し、それらを実行することも可能です。マルチクラウドは、複数のクラウド間でワークロードを移動できるようにすることで、さらなるメリットを提供します。

データ戦略

企業は、今すぐデータ戦略の成熟度を評価すべきです。今回の調査でデータ戦略について尋ねたところ、47%の回答者が、十分な検討を重ねたデータ戦略があると回答しましたが、「データ主導の戦略を策定する際に、機械学習（ML）を利用したデータマイニング/分析を活用していますか」と尋ねると、AI/MLを利用している回答者の割合は31%にまで大幅に低下しました。これは、リアルタイムの有益な情報に基づいて、戦略の成熟度を評価したり定義したりする機会でもあります。

データセキュリティ

どちらのクラウドモデルを実装する場合でも、セキュリティ対策は不可欠です。その一方で、タイプの異なるクラウドプラットフォーム、クラウドサービス、ソフトウェアコンポーネント、および信頼度の異なるユーザーやシステムの相互接続性を高める取り組みも極めて複雑なものになっています。ゼロトラストセキュリティのアプローチは、さまざまな変革の事例を成功に導いています。ゼロトラストでは、すべてのユーザー、デバイス、アプリケーションインスタンスが身元を証明するとともに、必要なリソースへのアクセス権を付与されている必要があります。ゼロトラストの定義や最適な実装方法についてはさまざまな意見がありますが、こうした議論は、テクノロジー主導ではなく、ビジネス主導で進める必要があります。ゼロトラストとは、何らかのセキュリティやネットワークテクノロジーを実装することではなく、セキュリティアーキテクチャーに対するまったく新しいアプローチを意味しています。



重要なワークロードに 最適な環境

どのワークロードが最も重要か

組織がどこで重要なワークロードを実行しているのかを確認するためには、まず、どのワークロードを最も重要と考えているかを明確にする必要がありました。そこで回答者に、以下のワークロードの優先順位を尋ねました。

- **エンタープライズITインフラストラクチャ/管理:** ポリシー、プロセス、機器、データなど、IT運用の基本的なコンポーネントを管理するために使用されるアプリケーション
- **ビジネスアプリケーション:** ERP、CRM、財務管理、人材管理 (HCM)
- **AI/ML:** 最新の高速コンピューティングを利用して、分類モデル、決定木、予測アルゴリズムなどの計算問題を迅速に反復して解決
- **AI運用:** ITの問題に関する早期警告サインを特定して修正
- **仮想デスクトップインフラストラクチャ:** デスクトップ環境および関連するアプリケーションソフトウェアを、そのアクセスに使用される物理クライアントデバイスから分離するアプリケーション
- **ロボットによるプロセス自動化:** ボットにより、基本的なIT/運用プロセスのセルフサービスを実現
- **データ管理:** リレーショナルデータベース管理システム/非リレーショナルデータベース管理システム (RDBMS、NRDBMS)

- **データマイニング/分析:** エンドユーザークエリ、予測分析、地理情報システム (GIS)、コンテンツ分析、検索、コグニティブプラットフォーム
- **メディアストリーミング:** ビデオストリーミング、コンテンツ、メディアアプリケーション
- **アプリケーションの開発とテスト:** ソフトウェアアプリケーションのテストや開発に使用されるツール
- **リモートコラボレーション:** 会議、インスタントメッセージ、メール、ソーシャルネットワーク、ファイル共有、オフィス生産性
- **Webサービス/Webアプリケーション:** Web上でクライアントの要求に対応する際に使用されるソフトウェアおよびハードウェア
- **コンテンツ配信:** デジタル情報の収集、管理、公開
- **製品エンジニアリング/テクノロジー:** コンピューター支援設計 (CAD)、コンピューター支援エンジニアリング (CAE)、コンピューター支援製造 (CAM)

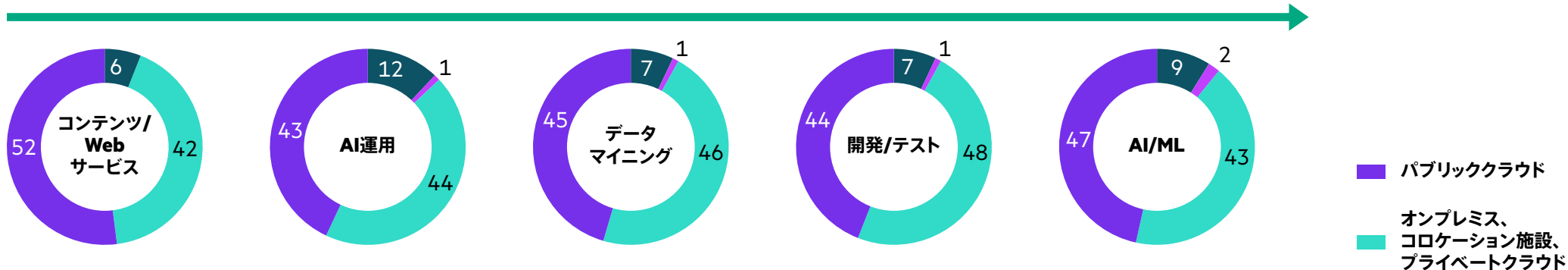
今回の調査では、40%の回答者がIT管理を最も重要なワークロードと考えており、僅差で2番目 (38%) にデータ管理を挙げていることが明らかになりました。全体としては、検証されたワークロードの30~40%が重要と判断されていました。

ワークロードを実行する環境はパブリックか、それともプライベートか

前述のワークロードリストと同じものを使用して、各組織が現在、特定のワークロードを実行している場所を尋ねたところ、パブリッククラウドを利用しているという回答と、オンプレミス、コロケーション施設、プライベートクラウドなどのよりプライベートな方法を利用しているという回答が、ちょうど半数ずつとなりました。

次のワークロードは、主にどこで実行されていますか

ミッションクリティカルではないワークロード (%)



最もミッションクリティカルなワークロード (%)

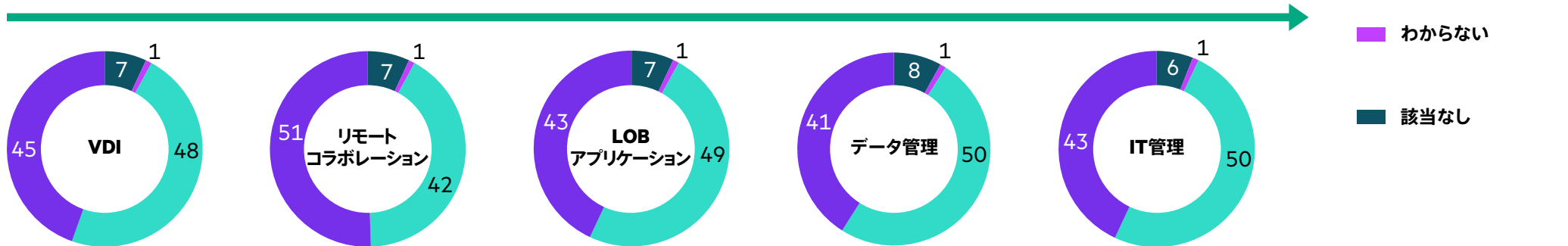


図2. 組織がワークロードを実行している場所

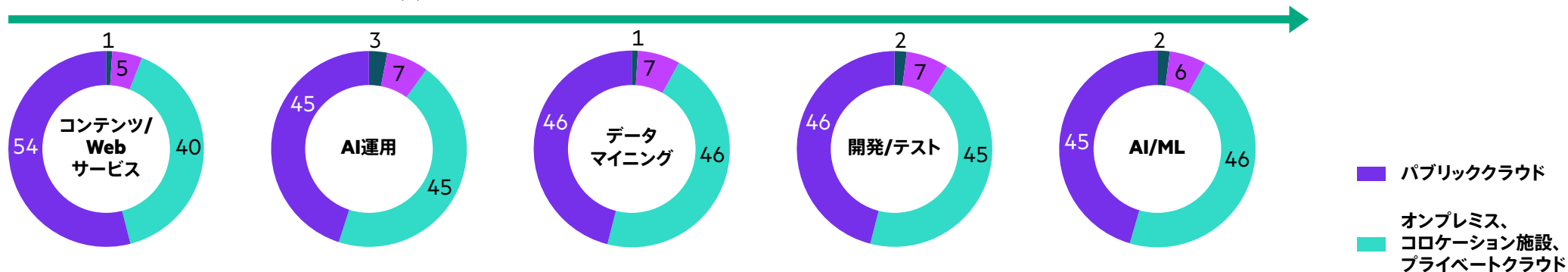
質問を言い換えて、「これらのワークロードはどこで実行すべきですか」と尋ねても、回答はやはり、パブリッククラウドとプライベートのリソースで半々に分られました。コンテンツ、メディア、Webサービスのワークロードだけは、パブリッククラウドと回答した割合が54%に上りました。

注目すべきは、およそ40%の意思決定者が、ワークロードを望ましくない場所で実行していると答えたことであり、この傾向はすべてのワークロードで共通していました。

市場は、ハイブリッドクラウドアプローチの利用を戦略的に推進しており、その動きは今回の調査でも実証されています。4分の3の企業は、ワークロードで何らかのハイブリッドクラウドを活用していると回答しています。また多くの回答者が、今後2年間で、特にエンタープライズIT管理、リモートコラボレーション、アプリケーション開発/テストを含むワークロードが、段階的にオンプレミスに移行されるとの見通しを示しました。

次のワークロードは、主にどこで実行すべきだと思いますか

ミッションクリティカルではないワークロード (%)



最もミッションクリティカルなワークロード (%)

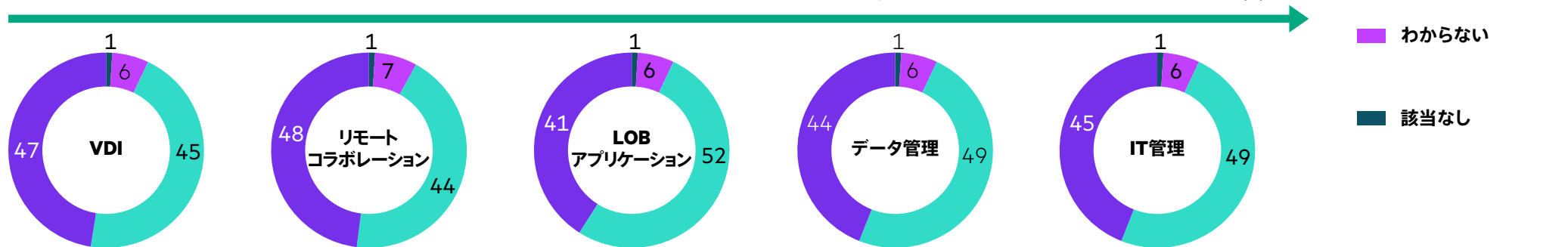


図3. 組織がワークロードを実行すべきだと考えている場所





クラウドへのワークロードの配置

クラウドモデルが進化を遂げる中、現在パブリッククラウドにあるワークロード、アプリケーション、およびデータを、オンプレミスやホスティングコロケーションプロバイダーに戻そうとする組織が増えています。今回の調査では、今後2年以内に、40%の回答者がワークロードの25~50%、25%の回答者が50%以上をオンプレミスに戻す計画を立てていることが明らかになりました。これは重大な戦略的判断であり、インフラストラクチャのセキュリティと管理を強化する必要があることが、こうした変更を進める要因となっています。

クラウドテクノロジーが成熟し、最適なクラウドの組み合わせは企業によって異なるという認識に達したことは、ワークロードの配置を決める際の重要な転換点でもあります。どちらのクラウドモデルを実装する場合でも、重要なのは、ビジネスが求めるアジリティとスピードを提供することです。

特定のビジネス目標に応じてワークロードと適切な配置先を組み合わせ、「達成しようとしている最終的な目標や成果は何か」を自問することをお勧めします。今回の調査データから、ビジネスの中心となるワークロードに関して、何を「ミッションクリティカル」とみなすかは業種によって異なることが明らかになりました。また、パブリッククラウドとオンプレミスで実行する場合のメリットやリスクを把握していないことから、重要なアプリケーションを実行すべき場所に大きなずれがあることもわかりました。認識は1つの見方であり、主観的になりがちですが、クラウドテクノロジーやクラウドソリューションは進化しており、古くなった情報に基づいた認識が誤っている可能性があります。このため、自己評価を行うことが非常に重要となっています。

重要なポイント - 今ワークロードが配置されている場所とワークロードを効率よく実行できる場所に大きなずれがあることが、ワークロードをオンプレミスに戻す動きにつながっている。

自己評価の チェックポイント



目標とする安定した状態の実現

前述の調査結果が示すように、ワークロードが配置されている場所とワークロードを配置すべき場所には大きなずれがあります。クラウド戦略を再評価することは、現在のワークロード戦略に対する偏見や先入観をすべて取り払う絶好の機会となります。現在のビジネスニーズに合わせて、戦略を全面的に見直すことをお勧めします。専門的な経験を積み、信頼できるアドバイザーである戦略的パートナーと連携することで、新たな視点から見る事が可能になります。

ビジネスクリティカルなオンライントランザクション処理 (OLTP)、データベースワークロード、アプリケーションの最新化、データ分析などの業務内容を問わず、企業のクラウドモデルは、重要なワークロードを迅速に実行するとともに、収益と評価の両面での競争力向上をサポートする必要があります。

まずは、ワークロード配置の決め手となる、以下のクラウド成功要因を評価します。

- **リスク** - 高度なサイバー攻撃の対象領域を隔離しつつ、複雑な法規制を遵守できていますか。また、セキュリティに脆弱性があるかどうかを検証しましたか。
- **パフォーマンス** - レイテンシの変動を許容できますか。また、重要な情報への即時アクセスを求めていますか。IoTの実装におけるリアルタイム処理は必要ですか。共有環境でのリソースの優先順位を決定しましたか。
- **管理** - ユーザーが必要とするリソースを必要なタイミングで、適切なコストで提供できますか。必要とされるアジリティを提供する領域で、こうしたニーズは変動していますか。競合他社との差別化につながるワークロードはどれですか。このようなワークロードについて、IT部門または事業部門の担当者は、どの程度管理する必要があると考えていますか。
- **コスト** - 現在のデジタルトランスフォーメーションを推進しつつ、将来のテクノロジーのニーズに柔軟に対応し続けるためのIT投資およびライフサイクル管理戦略を策定できますか。収益に直結し、事業継続に役立つアプリケーションはどれですか。





現在もこれからも 変わり続ける市場環境

市場ニーズへの柔軟な対応が求められる

無視できない大きな市場ニーズの1つに、新型コロナウイルス感染症の世界的流行の影響があります。調査結果によると、パンデミックにより、全世界でリモートワークの需要が増えていることが最大の共通要因となり、クラウドへの移行が平均62%増加しています。中でも医療機関は、パンデミックに対処してモバイルワークをサポートするための資金援助を受けていることが、クラウドへの移行を後押ししています。あらゆる業種で、リモートワーカーのサポートと生産性向上、リモートワークにおけるセキュアなアクセスとコラボレーションの実現が重点領域とみなされています。

統計データで驚かされることの1つに、パンデミックがさまざまな変化をもたらし、にわかにリモートワークをサポートするニーズが生じたにもかかわらず、大多数の企業が今も、イノベーションに重点を置いたイニシアチブではなく、メンテナンス関連のプロジェクトにIT予算の多くを投じていることがあります。IT予算におけるメンテナンスプロジェクトとイノベーションプロジェクトの配分がどのように変わったかを振り返ってもらったところ、多くの回答者が、ほとんど変わっていないと答えました。また半数以上が、IT予算の60%以上をメンテナンスに使用していると述べており、この水準は過去2年間で大きく変わっていません。

多くの組織が、パンデミックで先行き不透明な市場環境に対応するうえで、IT投資が役に立つと考えていることは明らかですが、イノベーションの推進には結び付いていません。しかし、特にこの目まぐるしく変化する市場環境やパンデミック下でリモートワーカーをサポートするニーズを考えると、イノベーションの必要性はこれまで以上に高まっています。



今後2年間で、主要なワークロードの

26～30%

がハイブリッドクラウド環境に配置されるようになる



今日の従業員に必要とされる機能を提供

ワークプレイスのエコシステムが発展する中、企業はワークプレイス戦略の見直しを迫られています。パンデミックがリモートワークへの移行を加速させたように、パンデミックが終息した時点で、多くの組織が新たに構築したハイブリッド環境にとどまると考えるには理由があります。実際に多くの回答者は、今後2年以内に主要なワークロードの26～30%（地域により異なる）がハイブリッドクラウド環境に配置されるようになる」と述べています。

1つだけ確かなことは、あらゆる職種や場所での生産性の向上と、安全で健康的な職場環境の確保が、すべての組織において最優先事項となっています。従業員がオフィス勤務に戻る場合、企業には、事業継続性を確保して、データや自動化を利用した清掃や接触者追跡などの迅速かつ確かな健康安全対策を行うことが求められます。また、従業員がリモートワークを続ける場合は、分散したエッジ環境で簡単に管理できる、セキュアで安定した接続により、クラウドの導入をスムーズかつ効果的に進める必要があります。

今後の見通し

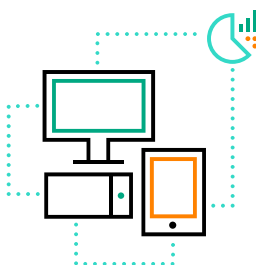
未来は誰にも予測できませんが、現在の経験から学び、今後何が起こるかを予想することは可能です。将来のハイブリッドクラウドを牽引するのが、あらゆる場所でクラウドのエクスペリエンスを構築するオンプレミスプロバイダーか、あらゆる場所でサービスを提供するパブリッククラウドプロバイダーのどちらになるかを尋ねたところ、結果は回答者の役割によって異なっており、大企業のIT意思決定者とデータサイエンティストではいずれも56%がオンプレミスと答えたのに対し、SMBの意思決定者と開発者ではそれぞれ53%と54%がパブリッククラウドと答えていました。企業が現在選択しているモデルにかかわらず、ハイブリッドクラウド方式を採用するケースは増加の一途をたどっています。

重要なポイント - ITの柔軟性は、新たな世界で必要とされる変更や変革の原動力としてもはやされているものの、大半のIT組織は、メンテナンスモードから脱却してイノベーションにシフトする行動を起こしていない。

自己評価の チェックポイント



柔軟な変革



これまで説明したように、調査の回答者は、ITコストの最適化が不十分であることが、平均1500万ドルものIT予算の無駄につながっていると報告しています。おそらくIT組織は、資産全体のIT効率の向上に関して自部門の行動を振り返るだけで、継続的なイノベーションプロジェクトをサポートできるように予算を変えることが可能になります。まとめると、ITインフラストラクチャにおけるメンテナンスとイノベーションのバランスが悪いことと、ハイブリッド資産およびマルチクラウド資産全体の容量使用率が十分に最適化されていないことが、高度に自動化されたインテリジェントで管理が容易なテクノロジーソリューションをすぐにでも導入しなければならない要因となっています。

すべてが証明されているように、ワークプレイスを再構築することはパンデミックにおいて極めて重要でした。また、2020年にはほとんどの企業の対応が後手に回っていたものの、多くの企業は、2021年以降に何が起るかに目を向けています。1つだけ明らかなのは、実店舗という明確な境界線はもう存在しないということです。変化にただ備えるのではなく、イノベーションやビジネス強化の可能性と捉え、この変革を機会として受け入れる必要があります。エッジからクラウドまでを網羅した戦略を通じて、完全なハイブリッドワークプレイスという目標を実現できます。



まとめ

ビジネス目標に合わせて運用方法を積極的に変えている企業は、クラウドの統合に最も成功しています。先進的な企業は、絶えず変化し、新しいテクノロジーを取り入れ、生まれ変わっています。企業の使命は、顧客満足度の向上、収益拡大、コスト削減、リスク軽減などの真のビジネス成果を実現することにあります。クラウド移行は、その過程にすぎません。こうした経験は、時には困難でリスクがあり、手間のかかるものになりますが、一方で、まったく新しい刺激的な経験になるというメリットもあり、それを成し遂げた企業は、素晴らしい成果の一部となります。

それではここで、現在の環境を自己評価して改善の機会を探っていきます。

クラウド移行を適切に進めるため、最初に以下の5つの指針を確認します。

1

万全のセキュリティ対策



悪いニュースで新聞の1面に載らないようにするためには、セキュリティを追加オプションとしてではなく、クラウドに関するあらゆる取り組みのコアコンポーネントとして扱う必要があります。テクノロジー、人材、プロセスを含む、クラウド移行のすべての要素にセキュリティを組み込むことを改めて検討します。

2

見えないものは管理できない



環境のパフォーマンス、使用量、コストを可視化することが、クラウドのリソースを効果的に使用するための足掛かりとなります。オーバープロビジョニングや低費用率が支えになり、回避できる無駄なコストが当然のように発生することももうありません。重要なのは、需要の山と谷を把握し、明確なクラウド戦略に従って行動することです。

3

データの有効活用を実現



組織は、重要なビジネス上の意思決定を下し、顧客満足度を維持してビジネスを運用するために、常にデータを移動する必要があります。自動運転車、患者の医療情報、不正検知などの迅速なデータアクセスが必要なユースケースで、即時性のニーズが高まっています。アクセスしやすさ、アクセス速度、隠れたデータイグレスコストを評価してください。もちろん、データトラフィックは保護されており、業界の規制に準拠した状態でなければなりません。

4

どこで実行するか



ビジネスの運用においてどのワークロードが重要かは、業種やお客様への最適なサービス提供方法によって異なります。ワークロードの配置を決定する際は、必要とされるセキュリティ、変更する場合の柔軟性、データアクセスの要件を考慮します。また、先入観なしに戦略を確認し、ビジネス目標との整合性を確保します。常に、「最終的な目標や成果は何か」を自問するようにしてください。それに従ってワークロードを配置します。

5

イノベーションの実現に不可欠な柔軟性



予期しない事態を受け入れ、未知の状況で成功できれば、競合他社への一歩先を行くことができます。IT部門が、予測不可能な状況下で修正を行うだけでなく、必要となった場合は、イノベーションの機会を利用して成長できるようにサポートする必要があります。メンテナンスコストのバランスを改善する方法を模索しつつ、モダナイゼーションを推進してください。その代表例として、適切なアクセス、セキュリティ、生産性と効率を向上させるツールにより、クラウドのエコシステムがリモートワーク環境に変革をもたらしています。次に到来するイノベーションへの備えも必要です。



クラウドにおける継続的なイノベーションと企業のワークフローの変化を踏まえて達した結論は、クラウドは画一的な環境ではないということです。組織によってニーズやビジネス目標が異なるだけでなく、パンデミックで明らかになったように、変化は避けられません。しかし幸いなことに、今日では多くのオプションやさまざまなタイプから選択して、組織にとって最適なバランスを実現することができます。また、専門知識を備えた戦略的なパートナーが、お客様とともに成長しながら、あらゆる場所にあるクラウド、データ、アプリケーションを最大限に活用できるようにサポートすることが可能です。

HPEの経験とイノベーションを利用して、クラウドへの投資の価値を最大限に高める方法

HPE GreenLakeクラウドサービス: HPE GreenLakeが、ビジネスの変革をサポートします。分散したクラウド環境をカバーする一元的なエクスペリエンスと単一の運用モデルを通じて、エッジ、コロケーション施設、データセンターにあるアプリケーションとデータを活用できます。

詳細情報

hpe.com/jp/greenlake

お客様のニーズに最適な製品をお選びください。
HPEのプリセールススペシャリストにお問い合わせください。




Chat



Email



Call

 [メールニュース配信登録](#)